

編集室紀行

「新卒で訪問看護師になれない」は都市伝説!?

「きらきら訪問ナースの会」の第1回レポート

4月19日、聖路加国際大学にて、新卒訪問看護師教育プログラムセミナー「きらきら訪問ナースの会」の第1回目が開催された。「きらきら訪問ナース」とは、学校を卒業してすぐ、つまり新卒として訪問ナースになった方のこと。30名で予定していた当セミナーであるが、北海道など遠方からの参加者も多く、当日の参加者は50名を超え、また新卒訪問看護師、ステーション管理者、教員、学生など参加者の立場も多岐にわたり、関心の高さが伺えた。

全3回のこのセミナーでは、毎回2組ずつ、実際に新卒で訪問ナースを採用しているステーションの管理者、およびそこで働く「きらきら訪問ナース」の方のプレゼンテーションがあり、それを受けて、参加者がグループワークに取り組む、というプログラムが用意されている。

代表を務める聖路加国際大学 山田雅子教授は開会の弁にて、新卒で訪問看護師の道へ進む人がまだまだ少ない現状について、「3年や5年の臨床経験を積んでからでない」と訪

問はやれない」という、いわゆる「よく言われる理由」が単なる「都市伝説」に過ぎず、「それでは臨床で何を学べば訪問看護へ出られるのか」が明らかになっていないと述べた。ただ新卒で訪問看護という道を全面的に肯定するのではなく、本当のところはどうか、必要なのは何か、立場を超えて皆で考えよう、というのが趣旨だ。

プレゼンターとして登壇したのは、訪問看護ステーション「みけ」代表の椎名美恵子さん、「みけ」へ新卒で入られた矢萩裕子さん。続いて予防医療事業にも取り組む「ケアプロ」事業部長の岩本大希さん、「ケアプロ」へ新卒訪問ナースとして入られた小瀬文彰さんだった。

「みけ」の新人教育では、先輩ナースはもちろんのこと、理学療法士など、他職種も含めたスタッフ全員の訪問に同行すること。また、地域の他のステーションとも協働した研修もしているという。新卒に限らず、新しく人を入れる際には、スタッフに「優しくしてあげてください」と必ず声をかけることをモットーとされているようで、「みけ」全体の雰囲気や大事にされているのだからことが伝わった。

「ケアプロ」の岩本さんは、教育という面でのアピールもさることながら、人件費などコスト面を含めたデータを用い、経営的な視点で、「訪問看護師を新卒で雇うこと」について、人件費が黒字となるタイミングなど詳細な説明があり、参加者からも、データは参考にしたい、とても助かるという声が挙がっていた。

ただ、何より印象的だったのは、新卒訪問看護師さんの矢萩さん、小瀬さんお二人のとてもイキイキとした表情だった。

矢萩さんは、新卒訪問看護師は、病院勤務に比べ1人で判断することが多く、働くうえで大きな不安となっていたが、電話などで常時相談できるよう、みんなで考える体制が整っているし、楽しいと思うことは利用者にも伝わる、と笑顔で語った。

また「ケアプロ」では、新卒の「振り返り」を重要視しており、小瀬さんが自身の新卒の(1年間)を振り返り、視野が広がっていった「成長」を具体的に述べていた。

プレゼンテーションが終わると、「新卒で訪問看護師を受け入れるには何が必要か」というグループワークが行われた。まず、それぞれのグループでテーマについて考えをまとめ、模造紙に書く。それから時間を区切って、グループが移動しつつ他のグループの模造紙に付箋でコメントを記していく、というスタイルだった。

各グループに新卒訪問看護師、管理者や教員、学生などがバランスよく配置されていたこともあり、どちらのグループでも異なった立場から非常に熱心な議論が行われていた。答えを出すのではなく、ともに考え、問題意識を共有する形式が功を奏していたのだろう。

今後の開催は8月23日(土)、12月20日(土)、場所は同じく聖路加国際大学。まだまだ「都市伝説」が残る新卒訪問看護師の道だが、学生への進路として考えてみたい、またむしろその道は無理だと思われる教員の方々、その道を進みたいという学生の皆さんに、新卒訪問看護師のイキイキした表情を、ぜひご覧になって欲しいと思う。

(本誌編集室)

